

ローラ・インガルス・ワイルダー「小さな家」シリーズ

——小説、テレビドラマへのアダプテーション

福田 二郎

自伝から小説へのアダプテーション

「小さな家」シリーズの作家、ローラ・インガルス・ワイルダーが生まれたのは一八六七年、つまり日本では江戸末期である。その頃はまだインディアン・テリトリイがあり、ヨーロッパからの移民、その二世三世による西部開拓が盛んな頃だった。「小さな家」シリーズの前身である *Pioneer Girl* を執筆したのはローラが六三歳の頃で、その翌年にローラは夫であるアルマンゾと一緒に車に乗ってハイウェイを走り、懐かしい子供の頃の開拓地を旅している。そしてシリーズ最後の作品 *These Happy Golden Years* が出版されたのは第二次世界大戦中の一九四三年、つまり昭和である。ランブから電気、馬車から自動車、航空機へ急激な発展。ローラは晩年になって、自分が生きてきた時代

の大きな変化を感じていたことだろう。

「小さな家」シリーズが大好評となって、ローラは一九三七年にデトロイトの出版社主催のブックフェアに招待され、そこでの講演でこのように述べている。

私はなんて素晴らしい子供時代を送ったのだろうか、と思うようになりました。私は開拓地、森、大平原にあるインディアンの土地、開拓の町、荒野に鉄道が敷かれるところ、まだ出来上がっていない国、入植、そして土地を得ようとやってくる農民たちなどを、まるごと見てきました。私はそのすべてを見て、体験してきたことがわかったのです。西部開拓の一連の段階、最初は未開拓の地に分け入り、それから開拓をし、そして農民となり、

町となるすべてです。それから私の人生において、私はアメリカ史のまるごと一時期を体現するものだとわかったのです。²

ローラは自分の人生を振り返り、それがアメリカ合衆国の開拓時代から近代国家へ発展する時代と重なっていることを意識し、その歴史を「自伝」という形に残したいと思ったのが、執筆の動機となったようだ。

それは最初 *Pioneer Girl* という作品になったが、出版社には断られ、一度お蔵入りとなった。そこで既に作家として有名になっていた娘ローズの指導、添削を受けて、現在の「小さな家」シリーズとなった。しかしローズによる書き換えは、プライドの高い母親にとっては受け入れるのが難しかったようで、だいぶバトルがあった様子は母と娘の書簡に残されている。³

ローラが内容の変更に抵抗を感じたのは、どうやら「小さな家」シリーズのフィクション性にあったようだ。つまりローラの記憶に基づいた「実話」に、脚色をすることである。人生というものは、それほどドラマチックな出来事の連続ではないし、聞いたことのない人の「自伝」や「伝記」というものは、一般的にはそれほどワクワク興奮するものではない。ローズがローラに宛てた書簡には、書き換えに関する強い主張が見られる。「聞いて、お願い。お願いだから聞いて！私が母さんの書いた物語にしたことは、ありふれた書き換えの仕事なの……私は母

さんを、大きなマーケット向けの作家として訓練しようとしているのよ。」死後になって書簡が公開され、このような母と娘のバトルがあったことが明らかになった。

売れたのは、手入れられた文章だつてことを理解してくれなくては。どんなふうに、そしてなぜ手を入れられたのか、学んでもらわなければなりません……何よりも、母さんは私の言うことを聞いてくれなくては……何年もずっと言っているじゃない、「お金を貯めるのを止めて、稼ぐのよ」……ねえ、私は外に出て、最初に稼いであげたわ。どんなふうに稼ぐか見せるためにね……でもね、もう母さんがやらなくちゃ。いま、もつと。(Fisher, 203)

思い出話から小説への書き換えは、多くの人々にウケる、商業ベースに乗せるための、出版へのアダプテーションと言えるだろう。それには、当時出版業界の興隆、流通業の発達にともなうて、売れる文筆業は大きな収入を得られるようになったという背景がある。ローズはローラに、文筆業で「稼ぐ」ことを教えようとしていたのだ。

ちなみに作家であるローズは、チャップリンやフォードといった有名な人の伝記を書いており、当時高い評価を得ていた。しかし伝記であるにもかかわらず、フィクション性の脚色が強すぎるといふ批判も受けている。⁴ 著者の想像による脚色が強け

れば面白い読み物になるが、事実の重視を期待する読者には不満も出てくるわけだ。ローズは成功した作家としての視点から、伝記や小説はエンターテイメント性の強いものであるべきだ、と思っていたようである。でもローラは生真面目に「売れようが売れまいが、少しでも嘘は書きたくない」と思っていたようだ。

『開拓の少女』から「小さな家」シリーズへ

それではローラの「思い出話」から、書き換えられて商業ベースに乗るような「出版向け物語」へ、*Pioneer Girl*から「小さな家」シリーズへの改編はどのようなところだろうか。

まずは子供向けの方針にしたので、残酷であったりグロテスクなところはカットしている。一冊の *Pioneer Girl* が最終的には八冊のシリーズになって、量としては大幅に増えているのに、カットしている部分もあるのだ。例をあげると、大草原に雷が落ちて、家族を失った二人の幼い少年がおびえた様子でとほとほと歩いてくる話がある(247)。悲しいエピソードだ。他にも吹雪で凍死してしまう子供の話などもあるし(139)。開拓地の過酷な自然や、福祉によるセーフティネットなどもまだない生活環境の厳しさは、書き換えのときに子供向けではないと避けられたようだ。

また、インディアン赤ん坊の遺体が吊るされてミイラにな

っており、それを見つけた白人が持ち去ってしまい、大きなトランプルに発展してしまう話(227)もシリーズには残されていない。こういったエピソードは、当時の開拓地の様子を記録する昔話としては価値のあるものかもしれないが、子供向けの話としては避けようということにしたのだろう。

次に男女関係の話だ。シリーズでは、恋愛関係の話はほとんど出てこない。しかし *Pioneer Girl* では、若い男女の話が何度も出てくる。開拓地の町では、若者たちの間ではよくパーティーが開かれ、ここではダンスやキスゲームといった遊びが流行っていて、ローラもそういった企画によく参加している。また若い弁護士に誘われたりしたこともあるが(256)、そういったエピソードはほとんどカットされた。

また、ローラが町で病気の娘の看護を任されていたときには、そこに住む荒くれ者に、あやうく強姦されそうになったこともあった(250)。さすがにそれも、子供向けの物語としてははばかれたのだろう。開拓地では、男女比が八対二だとか、九対一といった極端なアンバランスがあり、それはもちろん深刻な社会問題のひとつだった。それがローラの思い出話には反映されているのだが、シリーズの改訂によって消されてしまったとも言える。

次に、開拓民としての生活を脚色した例もある。この作品の冒頭は、幼少のローラの最初の記憶であるキャンザスやウイスコンシンといったインディアン・テリトリーに隣接、またはテ

リトリリーに不法に入り込んだ土地での生活から始まる。開拓の初期は農民というよりは狩猟の生活だ。Pioneer Girlではそういった生活の中でも、インガルス一家の子供たちは学校へ行っているのだ。しかしLittle House in the Big Woodsでは、そういったエピソードがカットされている。Pioneer Girlではローラたちは近隣の親戚の家に遊びに行くが、そこに住む家族には五人の子供たちがいる。その子供たちが通う学校の生徒たちは、みなスウェーデンからの移民グループだ。開拓時代には様々な国から来た移民のコミュニティが散在していて、お互いの生活上の距離感や意思疎通に苦労していた面があり、それもまた記録すべき興味深い点なのだが、シリーズでは削除されている。このように改編されたシリーズでは量が格段に増えているにもかかわらず、登場する人物はだいぶ減らされている。さらに研究者らの実地調査によれば、実際にインガルス一家が住んでいた場所と町や隣人との距離は、物語で書かれているよりもだいぶ近かったことが判明している。つまりシリーズでは「人里離れた場所での開拓」という環境が誇張されているのだ。

次に、よりドラマチックになる脚色をした例を見よう。たとえばローラがメアリーの金髪をねたんで喧嘩をしてみましたとが、Pioneer Girlでは叱られてすねているローラを、チャールズが抱き上げて場面は終わる(48)。しかしLittle House in the Big Woodsでは、そのあとに二人の会話と作者による説明が付け加えられている。

ローラは父さんに全部話してから尋ねた。
「父さんは、茶色い髪より金髪のほうが好きなんてことはないよね？」

父さんの青い目がきらりと光って、それから言った。
「そうだねえ、ローラ、私の髪も茶色だからなあ。」

ローラはそんなことを考えたこともなかった。父さんの髪は茶色で、髭も茶色だ。そして茶色はすてきな色だと思った。(184)

この会話が加えられて、はるかに感動的な場面に改編されている。ひとつには「思い出話」にはほとんどなかった直接話法によるセリフが、より劇的な効果をあげているということ、そしてPioneer Girlは自伝形式なので基本的に一人称の語りであるが、三人称による小説形式にすることによって、それぞれの登場人物の描写が、考えていることも含めてより細やかに描写することが可能になったということである。

次に大草原の「ぼつんと一軒家」のクリスマスマスの例をあげよう。まずはPioneer Girlから見ると、これは思い出話の形式をとっているから、子供目線の記憶になる。子供たちはクリスマスの朝に目を覚ますと、吊るした靴下の中にはプレゼントのブリキのカップが入っていた。

川向こうのお隣さんであるブラウンさんが、私たちを見

つめて立っていました。ブラウンさんが言うには、サンタクロースは前の晩に川を渡れなかったのだので、ブラウンさんにプレゼントを渡したのだそうです。それでその朝に川を泳いで渡ってきたというのです(10)。

お隣のブラウンさんが好意で子供たちにプレゼントを持ってきたのか、もしくはローラの両親が買い物頼んだのか、とにかく「サンタがプレゼントを預けてよこした」というほほえましいエピソードだ。これはせいぜい一〇行ほどで、すぐに話題が変わってしまう。

これが書き換えられた*Little House on the Prairie*では、「エドワーズさんがサンタに出会う」という一五ページほどの独立した一章になっている。こちらはローラが主人公とはいえ、インガルス一家の様子を描く小説の形をとっているから、その様子ははるかに詳しく描かれている。子供たちはクリスマスに雪が降るのか、サンタがこの大草原にぼつんとある一軒家を見つけることができるのかと心配している。

そこへ冷たい急流を渡ってきたエドワーズさんが到着する。そして町でサンタに出会ったが、サンタが川を渡れないので、エドワーズさんにプレゼントを預けてよこしたのだという。ここでエドワーズの直接話法によるサンタとの会話の再現が続く。エドワーズはサンタのセリフをそのまま子供たちに真似をしながら伝える。そこに子供たちのツッコミが入り、雪がないから

トナカイではなくラバだったことなどに対する子供の質問は、カッコに入って挿入される。

このような会話体はドラマのように生き生きとした描写を可能にして、思い出話よりもはるかに読者を引き込むものだ。視点がローラからだけではなく、登場人物たちを俯瞰する形になっていることも臨場感を高めている。

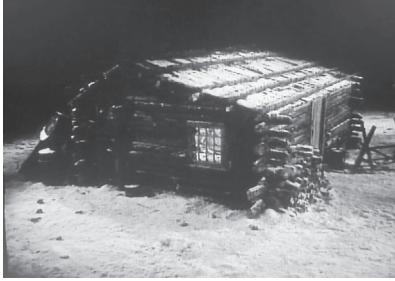
そのなかには、両親が子供たちを喜ばせたいと奮闘する姿なども含まれる。子供たちが喜んでい一方で、父さんはエドワーズさんと固い握手をし、大人は三人とも涙が出そうになっているが、その理由がローラにはわからないと書かれている。

そこには人里離れた地域での隣人との心温まる友情が描かれているのだ。子供たちを喜ばせるために冷たい川まで渡ってプレゼントを届けに来てくれる隣人の行為に感謝し、開拓地での心温まる「開拓地に住む人々の話」に脚色されているわけだ。

小説からテレビドラマへのアダプテーション

次に、アメリカNBCによって放映されたテレビシリーズへのアダプテーションを考察する。一九七四年に開始されてから二〇三回にも及ぶシリーズとなったテレビドラマ「大草原の小さな家」は、世界一四〇カ国で放映される大ヒットとなり、今でもどこかで放映されている。

この長いシリーズの最初に、テレビで二時間枠のパイロット



版が作成された。これはある程度原作に忠実なエピソードが使われている。そこに上記のクリスマス話が出てくる。

このエピソードでテレビドラマにアダプトした特徴をあげると、まず両親が子供たちのために何かしてやれないかと思いつく場面、つまり親からの視点で始まっている。テレビドラマでは、必ずしもローラを主人公としていない。実際に長いシリーズで、ローラがほとんど登場しない回もある。チャールズが主人公の回数が圧倒的に多いのだが、のちにチャールズはほとんど登場しなくもなる。この連続ドラマでは多様な人物をフレキシブルに利用している。

クリスマスのエピソードだが、テレビの映像では、雪に閉ざされた生活という視覚的な印象が残る。原作では雪が降らずに子供たちはその状況でサンタが櫛で来られるのかと心配していたのだが、映像的にはこちらのほうがずっとドラマチックにな

っている。

視覚効果と言えば、プレザントのブリキのカップだ。文字で読んでも想像力を働かせることはできるが、それを映像にすると、ピカピカに光る品物と、子供たちが喜ぶ笑顔がストレートに視聴者の目に入る。またテレビを通じて見ている現代の人間がブリキのカップを見れば、とても粗末なものだと感じるだろう。しかしあのまわりに何も無い西部開拓地では、子供たち

にとつては宝物になるのではないかと感じられる。物質的な豊かさと人間の幸福度の関係性を考えさせられる問題の鍵が、舞台背景と品物を視覚的に見せることで印象付けているのに成功しているといえよう。



エドワーズが危険をおかして雪の中をやってくるシーンは、大草原の自然の厳しさを強調するし、また幼い少女たちのかわいさを見ると、親が守ってやらなければならないと思う気持ちが意識される。幼いキヤリーの声や、ローラがプレゼントを受け取る際に一生懸命目をつむるしぐさなどは、「大人からの視線」が強調されている。視聴者は、少女たちの世代ではなく、もっと大人の視線が意識されているのだ。



最後には、大人同士のアイコンタクトがアップになる。子供たちが喜ぶ姿を見て、まず最初にチャールズがキヤロラインを見て、それからキヤロラインが視線を返す。その様子を見てエドワーズがキヤロラインを見つめ、それを受けてキヤロラインが満面の笑みを浮かべる。最後にローラの笑顔で終わるわけだが、ローラはアイコンタクトをしていない。

セリフのないこういった場面は小説では困難な、映像ならではの効果を生み出しているが、この無言のやりとりのカメラワークを見ると、ここでの中心人物はキャロラインと言えそうだが、背景にあるのは厳しい自然の中で生活する上での協力、助け合い、友情などで、明らかに大人からの視点であり、ローラの物語と言うよりは、親の世代の子育て物語となっている。そのなかで、苦勞する母親のキャロラインをチャールズが支える、という構図になっている。

テレビシリーズでもっとも重要な点は、ローラの父親、チャールズ・インガルスの理想化だ。原作のチャールズは、食糧事情の悪い西部開拓地なので当然ながら痩せていて髭づらだが、テレビのマイケル・ランドンは毎日肉を食べて筋トレをしているような肉体で、ヒゲや体毛がない。まわりの人物はヒゲがあったりお腹が出ていたりする。つまり現代向けのヴィジュアルが重視されていて、チャールズが引き立つ構図になっているのだ。

また話もチャールズの素晴らしさを際立たせるような筋立てが多く、まわりの人物は次々にいじけたりすねたりすることが多く、チャールズは常に頼りになって立派な父であり夫である構図となっている。特に妻のキャロラインにとっては、頼りになる一家を支える働き手であり、家族を常に大事にして、変わらずに妻を愛し、たまに茶目っ気を見せたりと徹底的に理想の姿に作られている。

ドラマを制作したNBCの調査によれば、視聴者の一番多い層は四十歳以上の女性だったことがわかっている(Anglim, 122)。先ほどキャロラインを「中心人物」と言ったが、視聴者が一番感情移入するのはキャロラインであり、その視線から「女から見た理想の夫チャールズ」が描かれているのだ。ローラの宿敵であるネリー・オルソン役のアリソン・アングリムは、実生活でもひどい意地悪な女と扱われたことがあるそうだが、何度となく「小さな家」のファンたちに、「マイケルもチャールズみたいな人なの？」と聞かれたそうだ(Anglim, 122)。チャールズの夫としての理想化は、視聴者の女性の視線を意識したものであり、それが映像化の成功の大きな要因となったと言えるだろう。これがテレビシリーズにアダプトされた一番大きな特徴といえる。

さてこのあとシリーズとなった連続ドラマは、全く原作にのっとっていない。世界中の「小さな家」のファンは、テレビシリーズを見たあとで原作を読むと、それは全くの別物だと驚くわけだ。ネリー役のアリソンは、出演が決まったあとに原作を読んだら、それがあまりに「のんびりで退屈」であることにショックを受けたと言っている。監督であるマイケル・ランドンが毎週のように「冒険・興奮・お涙」を盛り込んだので、ある人が「どうして原作に忠実にしないのか」と聞いたときに、マイケルは「一章がまるまるリンゴのフリッターを作る話になってたりするんだよ。映像になんか出来ないよ」と答えたそうだが

(Amgrim, 54)。

おそらくこれは「映像にできない」のではなく、「多くの人にうけない」ということになるのだろう。ドラマや映画は製作費がかかるので、視聴率や興行収入が見込めるような方針を取らざるを得なくなる。すると原作に忠実に作ることよりも、「高い視聴率を取れる番組」へのアダプテーションが優先される。視聴者の一番大きい層は、中年以上の女性ということがわかっていたので、ソープオペラ的な要素を入れる必要が出てくる。

ここではネリーやオルソン夫人のような意地悪な敵役が出てきて、最後にギャフンと言わせるオチになっていたり、毎回のよう事件が起こる。原作の西部開拓地では登場人物が少ないので、テレビシリーズではウォールナットグループという小さな町が舞台として固定され、様々な登場人物が入れ替わり登場する。インガルス一家にはレギュラーとなる養子が三人も増えている。

連続ドラマは毎週新しい作品を作成しなければならないという制約があるので、類似した筋立てが繰り返されたり、事件が起こると一回でやや無理のある結末にまとめなければならないという難しさが出てきたりする。テレビドラマという制約は、小説の「小さな家」シリーズとは別物にならざるを得なかったといえよう。

まとめると、ローラによる自伝は米国の開拓史を記す歴史的

記録としては価値あるものだったが、その素朴な内容はしばし退屈なものになりがちだったので、ローズの助力を得てそれを多くの読者に喜んでもらえるようなフィクションにアダプトすることによって、「小さな家」シリーズはベストセラーになり、それをマイケル・ランドンによってさらにまた感動する女性向けのドラマにアダプトというか全く作り変えることにより、大衆のテレビシリーズになったと言えるだろう。

註

- 1 Wilder, Laura Ingalls. *Little House Traveler*, Harper Collins Publishers, 2011.
- 2 "Laura's Book Fair Speech", *Little House Sampler*, Harper Perennial, 1988, p. 217. 以下、日本語訳は引用者による拙訳。
- 3 この書き換えにはローズのリバタリアニズム思想が多分に盛り込まれており、それに関してはローラも意見が一致しているようである。本論ではこの問題を取り上げないが、詳しくは拙著『ローラとアンの子育て物語』(音羽書房鶴見書店、二〇二二年)を参照された。
- 4 Woodside, Christine. *Liberarians on the Prairie*, Arcade Publishing, 2016, p. 24, p. 198.
- 5 Pioneer Girlの編者HMによって、作品と実在の場所や人物などの照合について、テキストに詳細な註がつけられている。

引用文献

- Arrgrim, Alison. *Confessions of a Prairie Bitch*, William Morrow Publishers, 2010.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*, Henry Holt and Company, 2017.
- Wilder, Laura Ingalls. *Little House in the Big Woods*. [1932] Harper & Row Publishers, 1953.
- . *Little House on the Prairie*. [1935] Harper & Row Publishers, 1953.
- . *Pioneer Girl: The Annotated Autobiography*, ed. by Pamela Smith Hill, South Dakota Historical Society Press, 2014.
- Wilder, Laura Ingalls and Lane, Rose Wilder, *Little House Sampler*, Harper Perennial, 1989.

映像資料

『大草原の小さな家―旅立ち』（DVD）¹ NBC Studios, Inc. 1974.